

こちらを言読みます!

詞 書	釈 文
<p>〔第一段〕  万機の政務をとり武をもては諸国の乱逆をうちしつめんかためなり速に致頼・信維・保昌等を召れて此旨を仰せらるへしと定申ければ即ち四人の武士を召て此由を仰す各申されける</p> <p>5は誠に弓箭の道には偏に朝敵を平げんかため也夫仰を辞申におよはす五材四義に忠をつくし</p> <p>左車石馬のはかりことをめくらすへしといへとも是はずかたをみざる天魔声をきかざる鬼神也合戦をとくる事人力およひかたき由をそ申ける爰に閑院の右大将実見の卿其時中納言にておはしけるか申されけるはかゝる変化の者も</p> <p>王土に跡をとめながら争か天氣にしたかはさるへき撰津守頼光丹後守保昌等に仰せられてめさるへき由を申されければ諸卿一同して両将を召されぬ我朝の天下の大事これに過へからず</p> <p>各武勇の志をはけまして速に凶害の輩をしつむへしと仰せられしかは各畏て罷出らる</p> <p>煙霞は東西に心なけれども風にあふ時は忽ち飛行す是則順の徳なり人臣は遠近におよひな20けれも命をふくむ時は馳走す是則忠のいたるなるかなや兩輩各宿所へ退出して綸言そむきかたかりし間思ひに出立けり別を惜む</p>	<p>「万機の政務を執り、武を持たば、諸国の乱逆を打ち静めんが為なり。速やかに致頼・頼信・信維・保昌等を召されて、此の旨を仰せ含めらるべし」と定め申しければ、</p> <p>即ち四人の武士を召して此の由を仰す。各申されける</p> <p>は、「誠に弓箭の道には、偏に朝敵を平げんが為なり。」</p> <p>夫の仰せを辞し申すに及ばず。五材四義に忠を尽くし、</p> <p>左車・右馬の謀を巡らすべしと雖も、</p> <p>是は姿を見ざる天魔、声を聞かざる鬼神なり。合戦を遂ぐる事、人力及び難き」由をぞ申しける。爰に閑院の右大将実見の卿、其の時、中納言</p> <p>にておはしけるが申されけるは、「斯かる変化の者も、</p> <p>王土に跡を留めながら、争でか天氣に従はざるべき。撰津守頼光・丹後守保昌などに仰せられて、召</p> <p>さるべき」由を申されければ、諸卿一同して両将を召されぬ。我朝の天下の大事、是に過ぐべからず。</p> <p>各武勇の志を励まして、「速やかに凶害の輩を鎮むべし」と仰せ含められしかば、各畏みて罷り出でらる。</p> <p>煙霞は東西に心無けれども、風に遇ふ時は忽ち飛行す。是、則ち順の徳なり。人臣は遠近に及び無けれども、命を含む時は馳走す。是、則ち忠の至るなるかなや。兩輩、各宿所へ退出して、綸言背き難かりし間、思ひ思ひに出で立ちけり。別れを惜しむ……</p>

〔第二段〕

けしき也各是をみて無疑変化の物と思はれければ太刀をぬき弓を引てむかふところに白翁すゝみいてゝきものをぬきかけてはたかになりて手を合はせていひけるはおそれあやし給ふ事なかれ各5を待たてまつるなり其故はおきなほ子共六七人もちたりしを一人ならず鬼王にとり失はれて此歎いかはかりとか思給ふ彼山臥は同行あまたとられ

此若僧は弟子師匠を失なひて歎給へは両将宣旨を給はりて鬼城へ尋向給由を伝承はる間悦を

10なして我等も御共つかまつりて心のゆくかたと彼所へ相向はんかためなりとかたり申けるに頼光のたまひけるはかくのたまへとも全心をゆるしたてまつるにはあらずなれとも我等は宣旨を頭にかけて侍れば我等か身には何条事かあるへき

15とて太刀をおさめ弓をゆるしぬ各用意の飯酒ともに至極おこなひて鬼城を求出へき様をはからふところに白翁申されけるは其すかた共にては尋給はん事かなふへからず縦あにおととなりともいか

てかたやすくあふ事をうへきすかたをやつして20様をかへて尋見給へとて唐櫃の中より柿衣柿袈裟頭巾など取いたしてとりく<sup>ま</sup>に負といふ

物九丁おなしく櫃中よりとりいたして **彼** 負に甲 **曹**

〔第三段〕

たり頭には黒髪もなく白髪なるかかほはせたとへむ方  
なし色々さまく<sup>く</sup>に血のつきたる物をあらひて木の枝にかけ岩のかとなんとにほしかけたり人く<sup>く</sup>是を見て無疑変化の物よと思て忽に命を

5失てんとする所に女手を合て我更に鬼神変

……気色なり。各是を見て、疑ひ無く変化の物と思はれければ、太刀を抜き、弓を引きて向かふ所に、白翁進み出でて、着物を脱ぎ掛けて裸になりて、手を合はせていひけるは、「恐れ怪しみ給ふ事勿れ。各

待ち奉るなり」其の故は、翁は子供六、七人持ちたりしを、一人ならず鬼王に取り失はれて、此の歎き

如何許りとか思ひ給ふ。彼の山臥は同行数多取られ、  
此の若僧は弟子・師匠を失ひて歎き給へば、両将

宣旨を給はりて、鬼城へ尋ね向かひ給ふ由を伝える間、悦びを

なして、「我等も御供仕りて、心の行く方と彼の所へ相向かはんが為なり」と語り申しけるに、頼光宣ひけるは、「斯く宣へども、全く心を許し奉るには非ず。なれども、我等は宣旨を頭にかけて侍れば、我等が身には何条事か有るべき」

とて、太刀を収め、弓を緩しぬ。各用意の飯酒ともに至極行なひて、鬼城を求め出すべき様を計らふ所に、白翁申されけるは、「其の姿どもにては尋ね給はん事、叶ふべからず。縦へ兄弟なりとも、争<sup>ま</sup>でか容易く会ふ事を得べき。姿を借して様を変へて尋ね見給へ」とて、唐櫃の中より柿衣・柿袈裟・頭巾等取り出して、とりどりに負(↓笈)といふ

物九丁、同じく櫃中より取り出して、彼の負(↓笈)に甲曹……

……たり。頭には黒髪もなく白髪なるが、顔唇へむ方

無し。色々、様々に血の付きたる物を洗ひて木の枝に掛け、岩の角等に干し掛けたり人々是を見て、「疑ひ無く変化の物よ」と思ひて、忽ち<sup>ち</sup>に命を失ひてんとする所に、女、手を合はせて、「我、



化の物にあらず本はよな生田の里の賤女にて  
侍しかおもはぬ外に鬼王にとられて此所に来て  
侍りし時骨こはく筋たかして捨られしかこの  
器量の者とかゝるきものをあらはせらるゝな  
10り古里もゆかしくしたしき者も恋しけれども  
春行秋たけて既に二百余廻の年月をかき  
ねたりさても此人くはいかにして是へはおはし

ぬるにか速に疾掃給へ此所は遥に人間の里を  
はなれたり齡しかも盛なる人く也いとかなし  
15くこそ覚ゆれと申ければ頼光問給けるは

此山は大江山の奥也人間をはなれたるとはな  
に事そとの給へは老女答けるは是へおはしつる

道には岩穴のありつるそかし其穴より此方  
は鬼かくしの里と申所なりとぞ申ける保昌賤

20女にまた問れけるはさて此所のありさまくは  
しくかたり申すを王の宣旨を蒙て尋来れる也

との給へはさてはありのまゝに申すへしとて鬼王  
の城は此上に侍る也八足の門を立てて酒天童子

と額をは書たる由をぞ聞侍し彼亭主の鬼王

25かりに童子の姿に交して酒を愛する也九重の  
内より公卿殿上人の姫君北方貴賤上下とりあ

つめて新理包丁してくひ物とす此比都に  
清明と申なる泰山府君を祭給ふによりて式

神護法隙なく国土を廻りて守護し給ふ故  
30に都より人をも取得すして帰る時はすゝろに  
腹をすゑかねて胸をたゝき齒をくひしは  
りて眼をいからかして侍る也つれくゝなるまゝに  
笛を吹て遊給ふ不思議なる事の侍るは天台

座主慈恵大師の御弟子御堂の入道殿の御子  
35のおさなき児をとりて鐵石の籠にこめたてま

つる所に彼兒無他念法花経を奉読給ふ御声

更に鬼神変

化の物に非ず。本はよな、生田の里の賤の女にて  
侍りしが、思はぬ外に鬼王に捕られて此所に来て  
侍りし時、骨強く筋高しとて捨てられしが、この  
器量の者として、斯かる着物を洗はせらるるな  
り。古里も懐しく、親しき者も恋しけれども、  
春行秋開けて既に二百余廻りの年月を重  
ねたり。さても此の人々は、如何にして是へはお  
はし

ぬるにか。速やかに疾く帰り給へ。此の所は遥か  
に人間の里を

離れたり。齡しかも盛りなる人々なり。いと悲し  
くこそ覚ゆれ」と申しければ、頼光問ひ給ひける  
は

「此の山は大江山の奥なり。人間を離れたるとは何  
事ぞ」との給へば、老女答へけるは、「是  
へおはしつる

道には、岩穴の有りつるそかし。其の穴より此の方  
は、鬼隠しの里と申す所なり」とぞ申しける。保  
昌、賤の

女にまた問はれけるは、「さて、此の所の有様、詳  
しく語り申すを、王の宣旨を蒙りて尋ね来れるな  
り」

との給へば、「さては有りの儘に申すべし」と  
とて、「鬼王

の城は此の上に侍るなり。八足の門を立てて、  
酒天童子」  
と額をば書きたる由をぞ聞き侍りし。彼の亭主の  
鬼王、

仮に童子の姿に交じて酒を愛するなり。九重の  
内より公卿・殿上人の姫君・北の方、貴賤上下取  
り集

めて、料理包丁して喰ひ物とす。此の比、都に  
清明と申すなる泰山府君を祭給ふによりて、式

神護法隙無く、国土を廻りて守護し給ふ故  
に、都より人をも取り得ずして帰る時は、漫ろに  
腹を据ゑかねて胸を叩き、齒を食い縛

りて眼を怒らかして侍るなり。徒然なる儘に、  
笛を吹きて遊び給ふ不思議なる事の侍るは、天台  
座主慈恵大師の御弟子御堂の入道殿の御子

の幼き児を取りて、鐵石の籠に込め奉  
る所に、彼の兒、他念無く「法花経」を読み奉り

晝さまには是まで聞へ侍そやか様にいきながら魔道の報をうけて侍れは其罪業を悲しく思に此御経の御声を承はるにこそ罪障も消滅するらんと忝侍る又慈恵大師の手

づから自ら行給へはや彼一乗守護のために諸天善神雨のごとくに集り雲のごとくに來て夙夜不斷に修行し給へるに鬼王ももちあつひて侍る由をそ語ける

か

〔第四段〕

賤女の詞に隨て此所をすこしあゆみのほりて見れば誠に八足の大門あり門の柱扉はうつくしく殊勝にしてあたりもかゝやく程也四方の山は瑠璃のごとし地は水精のすなをまきたるに似たり各これを見るに石室霜ふかくして迦葉の洞に來れるかと疑ひ羅徑雪あさくして懺悔の庭にのぞめるかことし頼光綱をめてして門の内

へ入て案内きけとの給へは綱忽に樊会か思を

なしてたゝ一人門の内へ入て寢殿とおほしき

10所へさしまはりて物申さんとたからかに申ければ内よりけたかくゆゝしき声にてなに物

そと答へ出たる人を見れば一丈計なる大

の童の練ぬきの小袖に大口ふみくるみて

笛もちたる手にて簾かきあけて誰人ぞ

15と問まなこゝからけたかくゆゝしき氣

色にてそ有ける綱すこしもさはかず諸國

修行の者山臥共十余人侍るか道にふみま

よひて是までまいるなり御やと給らんと

申ければ童子さらは惣門のきはなる廊へ

20入たてまつれとて案内者の女房をへたり此

女房綱か前にたちゆく袖をかほにあって

さめくと泣ければ綱事の故を問に女房答

けるは御すかたを見たてまつるに修行者

にこそおはしますめれ是へおはしなん後

25いきて古郷へ帰る事あるへからすいとをし

くかなしくこそ思ひたてまつれ我は是土

御門の内府宗成卿の第三のむすめなり過

給ふ御声、

晝様には是まで聞こへ侍るぞや。斯様に生きながら魔道の報を受けて侍れば、其の罪業を悲しく思ふに、此の御経の御声を承るにこそ、罪障も消滅するらんと、忝く侍る。また、慈恵大師の手

づから自ら行なひ給へばや、彼の乗守護の爲に、諸天善神雨の如くに集まり、雲の如くに來りて、夙夜不斷に修行し給へるに、鬼王も持ち扱ひて侍る由をそ語りける。

賤女の詞に隨ひて、此の所を少し歩み登りて見れば、誠に八足の大門有り。門の柱・扉は美しく殊勝にして、辺りも輝く程なり。四方の山は瑠璃の如し。地は水精の砂を撒きたるに似たり。各是を見るに、石室霜深くして迦葉の洞に來れるかと疑ひ、羅徑雪浅くして懺悔の庭に臨めるが如し。頼光、綱を召して、「門の内

へ入りて案内聞け」との給へば、綱、忽ち樊会(下)噲が思ひを

なして、唯一人門の内へ入りて、寢殿と思しき

所へ差し回りて、「物申さん」と高らかに申しければ、内より氣高く由々しき声にて、「何物

ぞ」と答へて出でたる人を見れば、一丈計なる大

の童の練貫の小袖に大口踏み包みて、

笛持ちたる手にて簾搔き上げて、「誰人ぞ」と問ふ。眼居・言柄氣高く由々しき氣

色にてそ有りける。綱少しも騒がず、「諸國

修行の者、山臥ども十余人侍るが、道に踏み迷

ひて是まで参るなり。御宿給ふらん」と

申しければ、童子、「然らば、惣門の隙なる廊へ

入れ奉れ」とて、案内者の女房副へたり。此の

女房、綱が前に立ち、ゆくゆく袖を顔に当てて

さめざめと泣きければ、綱、事の故を問ふに、女房答へ

けるは、「御姿を見奉るに、修行者

にこそおはしますめれ。是へおはしなん後、

生きて古郷へ帰る事有るべからず。愛しく悲しくこそ思ひ奉れ。我は是、土

御門の内府宗成卿の第三の娘なり。過ぐる



秋の比月を詠し程にあえなくとられて心  
うきめをは見る也すこしも心にたかぶものを  
30くた物となつて座をかへすくらひ侍れば  
目の前に見るも心うし今日や身のうゑに  
ならむずらんと思ふに雪山の鳥の心地して悲  
しく心うく侍ると申かゝるを聞にゆゝしき

事を聞物かなとおもへともさらぬ躰にもて  
35なして門のきはなる廊へ人々をも入たて  
まゝりぬ

〔第五段〕

其後とはかり有て容顔美麗ノ女房達円座  
十枚もてきて此人ノにしかせけり銀の瓶子  
のトヤかなるに酒入金の鉢なんとなにの  
肉やらんいとたかくもりあけてもちつゝ来り  
5彼もろこしの張文成といひし人が仙窟にいたり  
て神女にあひなれけん。かくや有けんそおほ  
えける頼光保昌同詞におなしは亭主の御出

あらんこそ面白く侍るへけれ我等はかりは珍  
からぬ同行共にてあるといはれければ暫あり  
10て亭主の童子いてきたりたけ一丈計なる

か眼ることから誠にかしこく智多ふかけにて  
色ノの小袖に白き袴に香の水干をそきた  
りけるうつくしき女房達四五人に或は円座或  
は脇息もたせてあたりもかゝやく計にゆゝしく  
15ぞ見えし童子頼光に問申されけるは御修  
行者何方より何なる所へとて御出候けるそと

問ひければ答られけるは諸国一見のためさま  
かり出たるかすゝろに山にふみ迷て是まで来る  
由をぞ答られける童子又我身のありさまを心に  
20かけて語りけり我は是酒をふかく愛するもの也され

は眷属等には酒天童子と異名によひつけられ侍  
也古はよな平野山を重代の私領として罷過し

を伝教師といひし不思議房か此山を点し取て  
峯には根本中堂を立ふもとは七社の靈神を

秋の比、月を詠しし程に、敢無く取られて心  
憂き目をば見るなり。少しも心に違ふ物をば、  
果物と名付けて座を変へず喰らひ侍れば、  
目の前に見るも心憂し。今日や身の上に  
ならむずらんと思ふに、雪山の鳥の心地して、悲  
しく心憂く侍る」と申す。斯かるを聞くに、由々  
しき

事を聞くものかと思へども、然らぬ体にて持  
成して、門の際なる廊へ人々をも入れ奉  
りぬ。

其の後、度ばかり有りて、容顔美麗の女房達、円座  
十枚持て来て、此の人々に敷かせけり。銀の瓶子  
の大やかなるに酒入れ、金の鉢等に何の  
肉やらん、いと高く盛り上げて持ちつつ来り。  
彼の唐土の張文成といひし人が仙窟に至り

て、神女に会ひ慣れけんも、斯くや有りけんぞ覺  
えける。頼光・保昌、同じ詞に、「同じくは、亭  
主の御出で

有らんこそ面白く侍るべけれ。我等許りは珍し  
からぬ同行共にてある」といはれければ、暫くあり  
て亭主の童子出で来り。丈一丈計りなる  
が、眼居・言柄誠に畏く、智恵深げにて、

色々の小袖に、白き袴に香の水干をぞ着た  
りける。美しき女房達四、五人に、或は円座、或  
は脇息持たせて、辺りも輝く計りに由々しく  
ぞ見えし。童子、頼光に問ひ申されけるは、「御修  
行者、何方より何なる所へとて御出で候ひけるぞ」  
と

問ひければ、答へられけるは、「諸国一見の為に罷  
り出でたるが、漫に山に踏み迷ひて、是まで来る」  
由をぞ答へられける。童子、又、我身の有様を心に  
懸けて語りけり。「我は是、酒を深く愛する者な  
り。然れ

ば、眷属等には酒天童子と異名に呼び付けられ侍  
る  
なり。古はよな、平野山を重代の私領として罷  
り過ぎし

を、伝教師といひし不思議の房が此の山を点し  
取りて、  
峰には根本中堂を立（建）て、麓には七社の靈神

25 崇<sup>たか</sup>め奉らんとせられしを、年来の住所なれば、  
且は名残も惜しく覚え、且は栖<sup>すま</sup>も無かりし事  
の口惜<sup>くち</sup>さに楠木<sup>くすのぎ</sup>に変じて度々<sup>たびたび</sup>障<sup>さや</sup>をなし、  
妨<sup>さまた</sup>げ侍りしかば、大師房<sup>おおいのぼう</sup>、此の木を切り、地を平  
らげて明

けなばと侍りし程に、其の夜の中に又、先のよりも  
30 大なる楠木<sup>くすのぎ</sup>に変じて侍りしを、伝教房<sup>でんきょうぼう</sup>、不思議  
かなと思ひて結界封じ給ひし上、阿耨多羅三藐  
三菩提<sup>さんぼつだい</sup>の仏達<sup>ぶつたち</sup>、我が立つ<sup>たつ</sup>杣<sup>ま</sup>に冥加<sup>みやが</sup>有らせ給へ」と  
申さ

れしかば、心は猛<sup>ま</sup>く思へども、力及ばず現はれ  
出でて、『然らば、居所を与へ給へ』と愁ひ申せ  
しに依<sup>よ</sup>て、

35 近江国<sup>おうみ</sup>かが山大師房<sup>やまおおいのぼう</sup>が領なりしを得たりしかば、  
はとて彼山にすみかえてありし程に、桓武天皇<sup>かんむす</sup>又勅<sup>ま</sup>  
ら

使を立て宣旨をよまれしかば、王土<sup>おうど</sup>に有りながら  
勅命<sup>まこと</sup>さすかに背かたかりしうゑ、天使<sup>てんし</sup>来りて追ひ出  
せしかば、力無くして又、此の山を迷ひ出でて、  
立ち宿るべき栖

40 も無かりし事の口惜<sup>くち</sup>さに、風に託<sup>たく</sup>し雲に乗りて、  
暫<sup>しばらく</sup>く  
は浮かれ侍りし程に、時々<sup>ときどき</sup>其の怨念<sup>おんねん</sup>の催す時は、  
悪心<sup>あくしん</sup>出で

来て、大風と成り早魃<sup>かんぼつ</sup>と成りて、国土に仇<sup>あだ</sup>を成  
して心を慰み侍りき。然るに仁明<sup>にめい</sup>の御宇かとお、  
嘉祥<sup>かじやう</sup>二年の比より此の所に住み初めて侍るが、斯  
かる

45 賢王<sup>けんわう</sup>にあひたてまつりて侍る時我等か威勢も  
心にまかせ侍る也其故は王威<sup>おうゐ</sup>ゆるければ民の  
力衰へ、仏神の加護薄ければ国土衰弊<sup>すいへい</sup>  
する事にて、愚王<sup>ぐわう</sup>に遇ふ時は童が心もいふ甲斐<sup>かひ</sup>  
無くなり、賢王<sup>けんわう</sup>・賢人の代に遇ふ時は我等が通力<sup>くうりき</sup>  
も侍るなり。昔物語は静かに申して聞かせ参

50 も侍るなり昔物語はしつかに申てきかせま  
いらせん先一献<sup>けん</sup>とて酒を勧む。頼光<sup>よりみつ</sup>の給へ(→宣)  
ひけ

るは童子にておはします上は、児にてこそお  
はしませ御先には如何<sup>いか</sup>でか盃<sup>さかずき</sup>は取るべき。  
先々との給へは童子うちわらひてこの御詞に

を  
崇<sup>たか</sup>め奉らんとせられしを、年来の住所なれば、  
且は名残も惜しく覚え、且は栖<sup>すま</sup>も無かりし事  
の口惜<sup>くち</sup>さに、楠木<sup>くすのぎ</sup>に変じて度々<sup>たびたび</sup>障<sup>さや</sup>をなし、  
妨<sup>さまた</sup>げ侍りしかば、大師房<sup>おおいのぼう</sup>、此の木を切り、地を平  
らげて明

けなばと侍りし程に、其の夜の中に又、先のよりも  
大なる楠木<sup>くすのぎ</sup>に変じて侍りしを、伝教房<sup>でんきょうぼう</sup>、不思議  
かなと思ひて結界封じ給ひし上、阿耨多羅三藐  
三菩提<sup>さんぼつだい</sup>の仏達<sup>ぶつたち</sup>、我が立つ<sup>たつ</sup>杣<sup>ま</sup>に冥加<sup>みやが</sup>有らせ給へ」と  
申さ

れしかば、心は猛<sup>ま</sup>く思へども、力及ばず現はれ  
出でて、『然らば、居所を与へ給へ』と愁ひ申せ  
しに依<sup>よ</sup>て、

近江国<sup>おうみ</sup>かが山大師房<sup>やまおおいのぼう</sup>が領なりしを得たりしかば、  
ばとて彼の山に住み替えてありし程に、桓武天皇<sup>かんむす</sup>  
又勅<sup>ま</sup>  
使を立て宣旨をよまれしかば、王土<sup>おうど</sup>に有りながら  
勅命<sup>まこと</sup>さすかに背き難かりし上、天使<sup>てんし</sup>来りて追ひ出  
せしかば、力無くして又、此の山を迷ひ出でて、  
立ち宿るべき栖

も無かりし事の口惜<sup>くち</sup>さに、風に託<sup>たく</sup>し雲に乗りて、  
暫<sup>しばらく</sup>く  
は浮かれ侍りし程に、時々<sup>ときどき</sup>其の怨念<sup>おんねん</sup>の催す時は、  
悪心<sup>あくしん</sup>出で

来て、大風と成り早魃<sup>かんぼつ</sup>と成りて、国土に仇<sup>あだ</sup>を成  
して心を慰み侍りき。然るに仁明<sup>にめい</sup>の御宇かとお、  
嘉祥<sup>かじやう</sup>二年の比より此の所に住み初めて侍るが、斯  
かる

賢王<sup>けんわう</sup>に遇ひ奉りて侍る時、我等か威勢も  
心に任せ侍るなり。其の故は、王威<sup>おうゐ</sup>緩ければ民の  
力衰へ、仏神の加護薄ければ国土衰弊<sup>すいへい</sup>  
する事にて、愚王<sup>ぐわう</sup>に遇ふ時は童が心もいふ甲斐<sup>かひ</sup>  
無くなり、賢王<sup>けんわう</sup>・賢人の代に遇ふ時は我等が通力<sup>くうりき</sup>  
も侍るなり。昔物語は静かに申して聞かせ参

50 も侍るなり。昔物語は静かに申して聞かせ参  
らせん。先々との給へは童子うちわらひてこの御詞に

るは、「童子にておはします上は、児にてこそお  
はしませ。御先には如何<sup>いか</sup>でか盃<sup>さかずき</sup>は取るべき。  
先々との給へは童子うちわらひてこの御詞に

「此の御詞に



55 こそおめ侍れとてさかつきを取て三盃して  
御詞に付てとて頼光にさすうけてのまんと  
するにまなくさくむつつけき事かきりなし  
さりけれともおの気色もなくしつゝと  
のみて保昌にさゝれぬ保昌のむよししてす  
60 てられぬさる所に老翁山臥等御酒は給はり侍  
ぬ我等か中に山臥の死筒とて用意したる物  
侍り此御前にて取出さてはいつの時をか期  
し侍るへきとて負の中より筒取出てすゝ  
めけり飲は取出ゝ我おとらしとしゐたりけり

こそ御目侍れ」とて、盃を取りて三盃して、  
「御詞に付けて」とて頼光に注す。受けて飲まんと  
するに、生臭くむつつけき事限り無し。  
然りけれども、癪の気色も無く静々と  
飲みて、保昌に注されぬ。保昌飲む由して捨  
てられぬ。然る所に老翁、「山臥等、御酒は給はり  
侍ら  
ぬ。我等か中に、山臥の死筒とて用意したる物  
侍り。此の御前にて取り出さては、いつの時をか期  
し侍るべき」とて、負(↓笈)の中より筒取り出し  
て勅  
めけり。飲めば取り出し取り出し、「我劣らじ」  
と強(↓ひ)たりけり。

下 卷

詞 書	釈 文
<p>〔第一段〕 其後はいく程なく黒雲にわか立くた りて四方は闇夜のことしつゞき風 あらくふき振動雷電なのめならずこ はいかなる事のあらんするそと見るところ 5種々無尽の変化の物共せいも大きに かたちもおそろしけにて田楽をしてと をりけり</p> <p>〔第二段〕 打つゝきて又此変化のものともやうゝの 渡物をそしける面もとりゝに姿もさ まゝ也或はをかしきありさまなる物もあり 或はうつくしき気色したる物もありおそ 5ろしく心もうこきぬへき物もあり筆に もかきしるしかた詞にもいひしらぬさま なれば各是を見られけるに頼光させ き居つゝろいて面もふらず目をもはなす 暫くまほりておはしければ眼の底より 10五色の光ぞ出たりける変化の物共申 けるはあの山臥は見らるゝか眼のひかり顔 のあらたちつねの人にはかはりて見ゆ当時</p>	<p>其の後は幾程無く、黒雲俄に立ち下 りて、四方は闇夜の如し。血臭き風 荒く吹き、振動・雷電斜めならず。是 は如何なる事の有らんぞ、と見る所に 種々、無尽の変化の物共、背も大きに かたちも恐ろしげにて、田楽をして通 りけり。</p> <p>打ち続きで、又、此の変化の物共、様々の 渡り物をそしける。面もとりどりに姿も様 様なり。或はをかしき有様なる物も有り、 或は美しき気色したる物も有り、恐 ろしく心も動きぬべき物も有り。筆に も書き記し難く、詞にも言ひ知らぬ様 なれば、各是を見られけるに、頼光、座席 居繕いて、面も振らず目をも放たず、 暫く守りておはしければ、眼の底より 五色の光ぞ出でたりける。変化の物共申し けるは、「あの山臥は見らるるか。眼の光、顔 の荒立ち、常の人には変はりて見ゆ。当時、</p>

都にあまねく人々のおそれをのゝくなる  
源頼光とかや申人こそ眼の底は光るな  
15 れそれならてはかゝる人も又ありける物かな  
我等が類のあきむきなるへき人にはあら  
すとてうしろさまにあはてゝ東西に走散  
巖石にたうれふしてそにけのきける

〔第三段〕

今は日のくるゝを相待ところに眷属の  
鬼共此人〳〵をはからんとや思けん容貌美  
麗なる女房達に変してかさねきぬとも  
をきかさりて五六人はかりうちつれて山臥  
5 達のまへにきたれりなといひやりたる  
事はなくてかたちつくりをしきりに  
しけり陽台の朝の雲に袖をかさね  
洛浦の神皇にましわりをむすふかとそ  
おほえし保昌のたまひけるは山臥修行  
10 者の居所に女房達の来れる事心へかた  
しすみやかに罷出よとの給へとも耳にも

聞入すして居けるを頼光目を暫もはなた  
れすにらみてまほられければおもはやくそ  
そろわしけに成て漸しりそきのきけるか  
15 申けるは此人〳〵の中には此山臥そゆへある  
人と見へ給ふ眼のむつかしさいふせしいさや  
とて各か本軀をあらはしてかきけつやう  
に逃走うせにけり

〔第四段〕

室をかまへて都鄙の老少をこめをく  
又忍び声にて経を誦奉る声のしけ  
れはいかなる人ぞと思ひて声をしるへに  
ゆきて見れば銅の籠を作て女房四〳〵  
5 人こめおきたる中にいと清けなる児の  
十四五はかりなるか練貫の小袖に白き大  
口きて守より小経を取て涙の露に  
点をそへてよまるゝにそ有ける此児の  
左右を見れば十羅刹女もろ〳〵の天菓を  
10 置て外に種々にかたちを現して守護す  
又薬師の十二神将はこのかうしの外にかたち  
を現して守給ふ又不動の炎光のこづくに

都に遍く人々の恐れ戦くなる  
源頼光とかや申す人こそ、眼の底は光るな  
れ。其ならでは、斯かる人も又有りける物かな。  
我等が類の欺き騙るべき人には非  
ず」とて、後ろ様に慌てて東西に走り散り、  
巖石に倒れ伏してぞ逃げ退きける。

今は日の暮るるを相待つ所に、眷属の  
鬼共、此の人々を謀らんとや思ひけん、容貌美  
麗なる女房達に変じて、襲衣ども  
を着飾りて、五、六人許り打ち連れて、山臥  
達の前に来れり。何といひ遣りたる  
事ば(一言葉)無くて、形作りを頼りに  
しけり。陽台の朝の雲に袖をかさね、  
洛浦の神皇に交わ(し)りを結ぶかとぞ  
覚えし。保昌宣ひけるは、「山臥修行  
者の居所に、女房達の来れる事、心得難  
し。速やかに罷り出よ」との給(宣)へども、耳  
にも

聞き入れずして居けるを、頼光、目を暫くも放た  
れず、睨みて守られければ、面映く漫  
わしげに成りて、漸く退きのきけるが  
申けるは、「此の人々の中には、此の山臥ぞ故有る  
人と見へ(し)給ふ。眼居の難しさ、鬱悒しい  
ざや」  
とて、各が本体を現はして、掻き消つ様  
に逃げ走り失せにけり。

室を構へて、都鄙の老少を籠め置く。  
又、忍び声にて経を誦み奉る声のしけ  
れば、如何なる人ぞと思ひて、声を導  
び行きて見れば、銅の籠を作りて女房四〳〵  
人籠め置きたる中に、いと清けなる児の  
十四、五許りなるが、練貫の小袖に白き大  
口着て、守より小経を取り出して、涙の露に  
点を添へて誦まるるにそ有りける。此の児の  
左右を見れば、十羅刹女、諸々の天菓を  
置きて、外に種々に形を現はして守護す。  
又、薬師の十二神将は、此の格子の外に形  
を現はして守り給ふ。又、不動の炎光の如くに



火も多あかりたる猿一疋ぞ立ちたりける是  
を見て頼光これはいかなる事にやと尋給  
15へは白羽答けるは此児法花経を誦誦し

奉る功によりて十羅刹此所に來臨して  
擁護し給ふ也又十二神將は此児の師匠  
七仏薬師を行し給故に守護して眷  
属の十二神來てまほり給ふ又猿の様  
20なる物はよなあれこそ叡山早尾権現よ  
かの本地大聖不動明王なれば生々而加  
護の誓といひ猿は又山王の使者かれこれ兩  
形をあらはしてまほり給ふ也とその給ける

頼光は此白翁もとよりあやししく思はれけり  
25まことに権現の加護にあらすは天魔の凶  
悪をしつめかたしひとへに是年来日来  
憑をかけたる靈神の化現かやと感喜あ  
ひならひければ保昌とひそかに目を見合て  
うなつき給けり此児と申はさきの老  
30女が語つる慈恵大師の御弟子御堂の  
入道殿の御子息是也

〔第五段〕

こゝを立のきて南の方を見れば軒  
ちかき花橘のにはひは風なつかしく  
むかしの袖の香やらんとおほえおほあら  
5きの森の小草いふせきまでにしけ  
りあへるたへ〜にとこなつかしきひめゆり  
のはなかほはせもめつらしく見へけるに  
大なる桶ともあまたすゑならへて人を  
籠にしおきたりそのにほひつくさくな  
まくさくして見るもかわゆき事限なし  
10かたわらを見ればふるき死骸は苦む  
し新し死骸は血つきて塚のごとく山  
のごとし西の方をみれば群梢雨にそんで  
梧楸の色紅なり百葉露結て蘭  
菊の花芳しはわれ松虫とはなけれとも  
15心ひかるよこ多〜やこゝに又唐人あまたこ  
めおきたりこれをみるに我朝にもかきら  
す天竺震旦の人までもとりおきけるよと  
みれば不便ともいふはかりなし北の方には  
雪にうつむ岸松の嵐を待色霜にあ

火燃え上がりたる猿一疋ぞ立ちたりける。是  
を見て頼光、「是は如何なる事にや」と尋ね給  
へば、白翁答へけるは、「此の児、『法花経』を誦  
誦し

奉る功によりて、十羅刹(女)、此の所に來臨して  
擁護し給ふなり。又、十二神將は此の児の師匠  
七仏薬師を行し給ふ故に、守護して眷  
属の十二神(將)來りて守り給ふ。又、猿の様  
なる物はよな、あれこそ叡山早尾権現よ。  
彼の本地大聖不動明王なれば、生々して加  
護の誓ひといひ、猿は又、山王の使者、彼此、兩  
形を現はして守り給ふなり」とぞの給(宣)ひけ  
る。

頼光は、此の白翁元より怪しく思はれけり。  
誠に権現の加護に非ずば、天魔の凶  
悪を鎮め難し。偏に是、年来日来、  
憑みを懸けたる靈神の化現かやと感喜相  
並びければ、保昌と窈かに目を見合ひて  
領き給ひけり。此の児と申すは、前の老  
女が語らひつる慈恵大師の御弟子、御堂の  
入道殿の御子息是なり。

此処を立ち退きて南の方を見れば、軒  
近き花橘の匂ひは風懐かしく、  
昔の袖の香やらんと覚え、大荒  
木の森の小草、鬱悒きまでに繁  
りあへる。絶へ〜絶えに常懐かしき姫百合  
の花の顔も珍しく見へ〜けるに、  
大きな桶ども数多据ゑ並べて人を  
籠に仕置きたり。其の匂ひ血臭く生  
臭くして、見るもかわゆき事限り無し。  
傍らを見れば、古き死骸は苦生  
し、新しき死骸は血付きて塚の如く山  
の如し。西の方を見れば、群梢、雨に染んで  
梧楸の色紅なり。百葉露結びて、蘭  
菊の花芳し。我松虫とは無けれども、  
心引かるる声々や。此処に又、唐人数多籠  
め置きたり。是を見るに、我が朝にも限ら  
ず。天竺・震旦の人までも取り置きけるよと  
見れば、不便ともいふ許りなし。北の方には  
雪に埋む岸、松の嵐を待つ色、霜に飽

20 ける庭の菊秋をのこせるにほひいつれも  
目とまりにけり只今は鬼とおほく  
はなけれども十余人そありけるそのほかは  
さま／＼に形を変して躰を化たる物とも  
おほくそありける目もあやに覚えて本の  
25 廊に帰てこのありさまを郎等共にかた  
られけり

〔第六段〕

童子鑽石の室をつよく構て其中にそ  
臥たりける上藤女房達四五人置てうて  
さすれなと下知してそねたりける何に  
しても此戸をあくへき様なかりけるに老  
5 たる少き二人の僧年来の行功只今也本  
尊界会穴賢／＼本誓誤給ふなどて袈  
装の下にて印契を結びて暫祈念し  
給へはかたく閉たりつる鑽石朝の露と  
きえゆしく見えつる寢所は一時に破れにけり  
10 各打入て見ければ昼こそ童子の形ちに変

しけれども夜は本の躰を頭はして長五丈  
計なる鬼の頭と身は赤く左の足は黒く  
右の手は黄に右の足は白く左の手は青く  
五色にまたらきて眼十五角五ををひたり  
15 ける是をみるに偏に夢の心地していふ  
はかりなき有様也されとも各心を静め  
てよりてうたんとはやりけるに若僧の給  
けるは大なる物を其太刀にて無相違きり  
おほせん事不定也若おきあかる事もあらん  
20 はゆしき大事になりなんす然者我等  
四人して此鬼王をとつておさへたらは各同  
心にかしら一所をきめてうてとそ教られける  
此儀尤も可然とて四人の客人手足に  
とりつきて押へたり鬼王頭計をもちあ  
25 けて麒麟無極めはなきか邪見極大めは  
なきか此等にはかられて今はかうとおほゆる  
敵うてやと千声百声叫ひければ頭切  
たる鬼共頭もなくておきあかりて走廻り  
手をひろけてをとりけり二人の將軍五人の  
30 兵同心に鬼の頭を打落つ此鬼王の頭天  
に飛登て叫廻る事おひたし頼光いそ  
ぎ綱公時二人かかふとをこひて我かふとの上

ける庭の菊、秋を残せる匂ひ、何れも  
目留まりにけり。只今は鬼共多く  
は無けれども、十余人そ有りける。其の外は  
様々に形を変じて、躰を化けたる物共  
多くぞ有りける。目も奇に覚えて、本の  
廊に帰りて、此の有様を郎等共に語  
られけり。

童子、鑽石の室を強く構へて、其の中にぞ  
臥したりける。上藤・女房達四、五人置きて、「腕  
摩れ」などと下知してぞ寝たりける。何に  
しても此の戸を開くべき様無かりけるに、老ひ  
たる、少き二人の僧「年来の行功只今なり。本  
尊界会、穴賢、穴賢。本誓誤り給ふな」とて袈  
装の下にて印契を結びて、暫く祈念し  
給へば、固く閉ちたりつる鑽石、朝の露と  
消え、由々しく見えつる寢所は一時に破れにけり。  
各打ち入りて見ければ、昼こそ童子の形ち(↓形)  
に変

じけれども、夜は本の体を頭はして、長五丈  
計りなる鬼の頭と身は赤く、左の足は黒く、  
右の手は黄に、右の足は白く、左の手は青く、  
五色に斑きて、眼十五、角五つぞ生ひたり  
ける。是を見るに、偏に夢の心地していふ  
許り無き有様なり。然れども、各心を静め  
て、寄りて打たんと早りけるに、若僧の給(↓宣)ひ  
けるは、「大なる物を其の太刀にて相違無く斬り  
果せん事不定なり。若し起き上がる事も有らん  
は、由々しき大事に成りなんす。然らば、我等  
四人して此の鬼王を取つて押さへたらば、各同  
心に頭、一所を決めて打て」とぞ教へられける。  
「此の儀、尤も然るべし」とて四人の客人、手足に  
取り付きて押さへたり。鬼王頭計りを持ち上  
げて、「麒麟無極眼は無きか、邪見極大眼は  
無きか。此等に謀られて、今は斯うと覚ゆる。  
敵打てや」と、千声百声叫びければ、頭切り  
たる鬼共、頭も無くて置き上がりて走り廻り、  
手を広げて踊りけり。二人の將軍、五人の  
兵、同心に鬼の頭を打ち落つ。此の鬼王の頭、天  
に飛び登りて叫び廻る事夥し。頼光急  
ぎ綱・公時二人が兜を請ひて、我が兜の上に



重てきたまひたりけり人／＼是を見てこはいかなる事と見るところに鬼の頭舞落て頼光のかふとの上にくひつきぬ頼光の給様眼をくしれとの給へは綱公時つとよりて刀をぬきて左右の目をくしりたりければ鬼王の頸死にけり其後甲をぬきて見たりければ甲二をくひとをしてそありける

重ねて着給ひたりけり。人々是を見て、「是は如何なる事ぞ」と見る所に、鬼の頭舞ひ落ちて、頼光の兜の上に喰ひ付きぬ。頼光の給(宣)ふ様、「眼を抉れ」との給(宣)へば、綱公時つと寄りて刀を抜きて左右の目を抉りたりければ、鬼王の頸死にけり。其の後、甲(兜)を脱ぎて見たりければ、甲(兜)二つを喰ひ通してぞ有りける。

詞書卷

詞書	訳文
<p>〔第一段〕          四人の客人官□とゆゑなく大江山の有し道まで帰ぬ此時四人の人／＼申されけるはこのほどの御なごり難侍るものかな宣言をかふり給へる將軍5達にておはしませは打平げ給はん事は左右に及ばねともゆゑしき大事□侍て我等御共しつる也今は是より暇を申て罷帰へし当帝をはよの常の王とは思給へからす昔より今にいたる10まで賢王あまたましますといひながら衆生化度の方便によりて粟散の王とは生給へとも慈尊下生たるにて慈氏の化儀をほとこし給ふされは近臣百官のために因を。遠各諸人に及まで15めくみをあたゑましますは本師釈尊の遺勅誤給はざるにあらす当来導師の教誠にたのみ有へし清明と申は秘密真言の棟梁龍樹菩薩の変化也昔は白道沙門とあらはれ今者清明といふ20はかせに生たり陰陽の秘術をあなかに執し被思しかは二度さすのみこと成てかゝる賢王の御代に仕給ふ也頼光も我身をかるく思給へからす致頼頼信維衛保昌とて四人の名將おはしませとも此人数にもさしぬけて洛25</p>	<p>四人の客人、官□と故無く大江山の有りし道まで帰りぬ。此の時、四人の人々申されけるは、「此の程の御名残忘れ難く侍るものかな。宣言を蒙り給へる將軍達にておはしませば、打ち平げ給はん事は左右に及ばねども、由々しき大事□侍りて、我等御共(供)しつるなり。今は是より暇を申して罷り帰るべし。『当帝をば、世の常の王とは思ひ給ふべからず。昔より今に至るまで、賢王数多まします』といひながら、衆生化度の方便によりて、粟散の王とは生じ給へども、慈尊下生たるにて慈氏の化儀を施し給ふ。然れば、近臣百官の為に因を結び、遠客諸人に及ぶまで恵みを与ゑましますば、本師釈尊の遺勅、誤り給はざるに非ず。当来、導師の教、誠に頼み有るべし。清明と申すは、秘密真言の棟梁、龍樹菩薩の変化なり。昔は白道沙門と現はれ、今は清明といふ博士に生じたり。陰陽の秘術を強ちに執し、思被れしかば、二度指の神子と成りて斯かる賢王の御代に仕り給ふなり。頼光も、我が身を軽く思ひ給ふべからず。致頼頼信・維衛・保昌とて四人の名將おはしませども、此の人数にも差し抜けて、洛</p>

中洛外の上下に恐敬はれ給事則  
五大尊の其中に大威徳の化生にて  
ます其故也然れば悪魔降伏も世

30の殿原を人四天とよふ事其故有る  
ものをや綱は多門天公時は持国天忠  
道は増長天季武は広目天ともに天

下を哀愍し禁中を守護し給ふ翁  
かことはを疑給ふ事なかれと語られ  
35ければ是を聞く貴賤上下の輩た

な心をあはせけりさてこそ一条の  
院をば権者とあふき奉けれ又頼  
光をば二生の人とは恐申けれ保昌の

給けるは先世の契さとりやすく  
40今度の御名残難忘詞にも尽かたく筆  
にも註しかたし同は御形見を給て

且は後日の思出にもし且は末代の物語  
にもと被申ければ尤もとて翁先白淨  
衣をぬきて保昌にたてまつる保昌又

45是を給てうは矢の鎧をぬきて老翁  
にたてまつる山臥は柿の衣をぬきて  
保昌に奉る保昌ははき給へる太刀を

ときて山ふしにたてまつる老僧是を  
見給て御かたみ共取ちか多給ふか浦山  
50敷侍るに撰津守殿いさせ給へかたみ

か多申さむとて懐より水精の念珠  
を取出て頼光にたてまつらる其とき  
頼光かふとをぬきて老僧被重る若

僧又金の錫杖をとり出て頼光にた  
55てまつりしかは頼光は腰のかたなを  
若僧にたてまつりて後頼光おのく

の御名をば誰と申奉る御在所は  
何方におはしますと尋申されければ  
老翁の給けるは我は住吉の辺の旧仁な

60りとてまほろしのことくにて失給ぬ山ふ  
しは熊野山那智の辺に侍る也名をば  
雲滝と申とて是もかきけつやうに失

られけり老僧の給けるは此僧は  
八幡の辺に侍るか撰つ守殿へ御祈禱の  
65ために参たりとて雲煙のことくにて失ら

中洛外の上下に恐れ敬はれ給ふ事、則ち  
五大尊の其中、大威徳の化生にてまし  
ます其の故なり。然れば、悪魔降伏も世

に越多、盜賊追討も人に勝れ給へるなり。四人  
の殿原を人、(四天)と呼ぶ事、其の故有る  
物をや。綱は多門天、公時は持国天、忠

道は増長天、季武は広目天、共に天  
下を哀愍し、禁中を守護し給ふ翁  
が言葉を疑ひ給ふ事勿れ」と語られ

ければ、是を聞く貴賤上下の輩、た  
な心(↓掌)を合はせけり。さてこそ、一条の  
院をば権者と仰ぎ奉りけれ。又、頼

光をば二生の人とは恐れ申しけれ。保昌の  
給(↓宣)ひけるは、「先世の契り、悟り易く、  
今度の御名残忘れ難く、詞にも尽くし難く、筆

にも註し難し。同じくは御形見を給ひて、  
且は後日の思ひ出にもし、且は末代の物語  
にも」と申されければ、「尤も」とて翁、先づ白淨

衣を脱ぎて保昌に奉る。保昌、又  
是を給ひて、上矢の鎧を抜き老翁  
に奉る。山臥は柿の衣を脱ぎて

保昌に奉る。保昌は佩き給へる太刀を  
解きて山臥に奉る。老僧是を  
見給ひて、御形見共取り違ふ給ふが、浦山

敷(↓羨ましく)侍るに、「撰津守殿居させ給へ。  
形見  
換ふ申さむ」とて、懐より水精の念珠  
を取り出して頼光に奉らる。其の時、

頼光兜を脱ぎて、老僧重ねらる。若  
僧、又金の錫杖を取り出して、頼光に奉  
りしかば、頼光は腰の刀を

若僧に奉りて後、頼光、「各々  
の御名をば誰と申し奉る。御在所は  
何方におはします」と尋ね申されければ、

老翁の給(↓宣)ひけるは、「我は住吉の辺りの旧  
仁な  
り」とて幻の如くにて失せ給ひぬ。山臥

は、「熊野山那智の辺りに侍るなり。名をば  
雲滝と申す」とて、是も掻き消す様に失せ  
られけり。老僧の給(↓宣)ひけるは、「此の僧は

八幡の辺りに侍るが、撰津守殿へ御祈禱の  
為に参りたり」とて雲煙の如くにて失せら



けり若僧は延暦寺の辺に住する沙  
門なりとて何も皆失られにけり情此心

を案するに是併年来憑をかけ志を  
運びし靈神達且は鎮護国家の誓によ  
り且は利益衆生の願にまかせて我等  
を守護し給けるよと弥たのもしくか  
へしけなく思奉る事限なし凡神の  
威を顯事は是人の崇奉るにより人  
の運の全する事は又神の助けに非ず  
やたとへは響きの音に應ずるかことく月  
の水にやとるかことし盛応みちまし  
はる事よの常の習といひなからい  
しるき事上古にも未代にもためし  
すくなきこととぞおほえし

第二段

今者本の七人の輩と鬼王の取置し  
入く相共に大江山のふもといくの道  
はとに飯菴作て忠道を使としていそぎ  
迎の馬人催して来へき由申遣す兒又  
女房共の親類眷属にいたるまで此使  
百廻たりければ彼家く騒ぎ悦の  
しる事かきりなしうれしきにもつら  
きにも先立物は涙也與車馬人思に大  
江山へといそぎければ霞を隔つるいくの  
道も遠からず呆れ惑へり。或は妻に  
あひ夫にあふて夢かやゆめにあらざる  
かとうたかひ迷える人もあり又親を尋に  
をやもなく子を尋に子もなきたくひ  
かなしみをいたき歎あふ事限なしかく  
て有へき事ならねはをのく家ちへいそ  
ぎけり二人の大將軍は其すかたをあらた  
めす柿の衣の上に鎧をき或は頭巾を肩半  
に責入てかふとをのけひた。にきなして都へ  
そ入られける道々所々山々関々に是をみる  
もの紋をしらすそ有ける今日既に摂津  
守頼光丹後守保昌鬼王の頸を隨身して  
都へ入由聞へしかは彼郎等共馳来て兩

将の軍兵大勢也見物の道俗男女幾千万

れけり。若僧は、「延暦寺の辺りに住する沙  
門なり」とて、何れも皆失せられにけり。情此  
の心

を案するに、是併せて年来憑みを懸け、志を  
運びし靈神達、且は鎮護国家の誓ひによ  
り、且は利益衆生の願ひに任せて我等  
を守護し給ひけるよ、と彌頼もしく忝  
く思ひ奉る事限り無し。凡そ神の  
威を顯はす事は、是、人の崇め奉るにより、人  
の運の全うする事は、又、神の助けに非ず  
や。例へば、響きの音に應ずるが如く、月  
の水に宿るが如し。盛(盛)感(感)応(応)満(満)ち(ち)交  
はる事、世の常の習ひといひながら、著  
き事、上古にも未代にも例  
すくなき事とぞ覚えし。

今本本の七人の輩と鬼王の取り置きし  
人々相共に、大江山の麓、生野の道の  
程に飯菴作りて、忠道を使ひとして、急ぎ  
迎への馬人催して来べき由、申し遣はす。兒、又  
女房共の親類眷属に至るまで、此の使ひ  
告げ廻りたりければ、彼の家彼の家、騒ぎ悦び罵  
る事限り無し。嬉しきにも辛  
きにも先立つ物は涙なり。與車・馬人、思ひ思ひ  
に大

江山へと急ぎければ、霞を隔てつる生野の  
道も遠からず呆れ惑へり。或は妻に  
会ひ夫に会ふて、夢かや夢に非ざる  
かと疑ひ迷える人も有り。又、親を尋ぬるに  
親も無く、子を尋ぬるに子も無き類  
悲しみを抱き、歎き合ふ事限り無し。斯く  
て有るべき事ならねば、各々家路へ急  
ぎけり。二人の大將軍は其の姿を改  
めず、柿の衣の上に鎧を着、或は頭巾を肩半ば  
に責め入れて、兜を退け、額に着為して都へ  
ぞ入られる道々、所々、山々、関々に是を見る  
者、教を知らずぞ有りける。今日既に摂津  
守頼光・丹後守保昌、鬼王の頸を隨身して  
都へ入る由、聞こへしかば、彼の郎等共、馳せ来  
りて兩

将の軍兵大勢なり。見物の道俗男女、幾千万

といふ数をしらす人は踵をそはたて車は轆

25をめぐらす事をえす弓箭の家に生れ武  
勇の道に入りて芸をあらはし名をあく

る事勝計するに及ばねども魔王・鬼神  
を随ふる事田村利仁の外は珍事なり

と声々口々にさゝめきあへり毒鬼を  
30大内へ入るゝ事有へからずとて大路をわ

たされければ主上々皇より始奉て撰政  
関白以下にいたるまで車を飛てゑいらん

有けり鬼王の頸といひ將軍の気色と  
いひ誠に耳目を驚かしけり事の由を

35奏しければ不思議の由宣下有て彼  
頸をは宇治の宝蔵にぞ納られける御堂

入道大相国御参内有て被申けるは上古よ  
り末代にいたるまで代々朝敵を打ち靡

くる輩多しといへともかゝる希代の勝  
40事に及ぶ事先蹤承はり及はす早速

に勅賞行はるへき由取申されしかば  
丹後守保昌西夷大將軍に成て筑

前国を給る撰津守頼光は東夷大  
將軍に被成て陸奥国をそ給はりけ

45る凡大國には一度朝敵を平つれば  
半國を給て其しやう七世にたえすと

見たり然而我朝本より小國なり一  
國の受領は半國の賞にも越ゑたる

をや況や東西の將軍の宣旨を  
50加ふる事莫大の勅賞たりといへとも

たれ人か支申へきと九重の上下  
一同にのゝしりけり

〔第三段〕  
さる外に魔界におかされて家郷を離て肝

をくたき妻子を恋て魂をけす葬を  
鬼脣にまち骸を魔腹に期しき深洞に

籠られて東西をしらす幽窟に被閉  
5て日月を見る事を多すとへは空を飛

鳥の羽をぬかれ水におよく魚の鱗をそ  
かれたるに似たり然を今兩將軍の威

力にひかれて魔王の悪害をまぬかる赤  
子の母を得たるよりもすぎ早苗の雨に

10あえるもこゑたるをや悲み悦相並ひ手  
の舞足のふみところを失なふ願所は業

といふ数を知らず。人は踵を敵て、車は轆

を廻らす事を得ず。〔弓箭の家に生まれ、武

勇の道に入りて芸を現はし、名を挙げ  
る事勝計するに及ばねども、魔王・鬼神

を随ふる事、田村・利仁の外は珍事なり〕  
と、声々口々にさざめき合へり。毒鬼を

大内へ入るる事有るべからずとて、大路を渡  
されければ、主上・上皇より始め奉りて、撰政・

関白以下に至るまで、車を飛ばして観覽  
有りけり。鬼王の頸といひ、將軍の気色と

いひ、誠に耳目を驚かしけり。事の由を  
奏しければ、不思議の由、宣下有りて、彼の

頸をは宇治の宝蔵にぞ納められける。御堂  
入道大相国、御参内有りて申されけるは、〔上古よ

り末代に至るまで、代々朝敵を打ち靡  
くる輩多しと雖も、斯かる希代の勝

事に及ぶ事、先蹤承り及ばず。早速  
に勅賞行はるべき〕由、取り申されしかば、

丹後守保昌、西夷大將軍に成りて、筑  
前国を給はる。撰津守頼光は東夷大

將軍に成られて、陸奥国をそ給はりけ  
る。〔凡そ大國には、一度朝敵を平げつれば、

半國を給ひて其の賞七世に絶えず、と  
見たり。然して我が朝、本より小國なり。一

國の受領は半國の賞にも越ゑたる  
をや。況や、東西の將軍の宣旨を

加ふる事、莫大の勅賞たりと雖も、  
誰人が支へ申すべき〕と九重の上下、

一同に罵りけり。  
〔然る外に魔界に犯されて、家郷を離れて肝

を砕き、妻子を恋ひて魂を消す。葬を  
鬼脣に待ち、骸を魔腹に期しき。深洞に

籠められて東西を知らず。幽窟に閉じられ  
て日月を見る事を得ず。例へば、空を飛ぶ

鳥の羽を抜かれ、水に泳ぐ魚の鱗を削  
がれたるに似たり。然るを今兩將軍の威

力に引かれて魔王の悪害を免る。赤  
子の母を得たるよりも過ぎ、早苗の雨に  
遭えるにも越ゑたるをや。悲しみ悦び、相並ひ手  
の舞ひ、足の踏み所を失ふ。願ふ所は業



遠の恵を垂れ好隣の義を願て我等を  
本土へゆるし帰せ且は此珍事によりて  
明王の威験を遠方につたへ兩將の面目を  
15 異朝に施さんと申たりければ申上所  
無謂にあらすとて九国に下つかはして便風

を待へしと定ければかれら筑紫のは  
かたへそ下ける唐人かんさぎの津に下

〔第四段〕

り又有しきるものあらひし老女悦  
いさみて帰り程に此年比は鬼のちか  
らにひかれて却老延齡いきをひも有  
つれ今者鬼王の通力も失ぬるゆゑにや  
5 山を出かねて老かゝまりてそふしたり  
ける渭水を別て重てたゝむ呂尚父か  
額の浪かと疑はれ商山を出てなを空  
かりし遠司徒か鬢のゆきかと誤たれ  
たり旧里に帰るとも錦の袴をきされ  
10 は買臣の勇もなかりけり家を離て  
星霜既に二百余廻に成ぬればをのつ  
から争か七世の孫をも相見へきされと  
もなを旧里をおもふ心有て都の方を  
そかへりみける蛭蟬の齡夕をまたぬ習  
15 にて芭蕉の命風にやふれしかはいつの  
なしみとはなけれどもをのくあはれに  
おほえて袖をそしほりける

遠の恵みを垂れ、好隣の義を願ひて我等を  
本土へ許し帰せ。且は此、珍事によりて  
明王の威験を遠方に伝へ、兩將の面目を  
異朝に施さんと申したりければ、「申し上ぐる所  
謂無きに非ず」とて、九国に下し遣はして、「便  
風  
を待つべし」と定めければ、彼等、筑紫の博  
多へぞ下りける。唐人、神崎の津に下…

…り、又有りし着る物洗ひし老女、悦び  
勇みて帰りし程に、此の年比は鬼の力  
に引かれて、却老延齡勢ひも有り  
つれ。今は鬼王の通力も失せぬる故にや、  
山を出でかねて老ひ屈まりてぞ伏したり  
ける。渭水を別れて重ねて発たむ呂尚父が  
額の浪かと疑はれ、商山を出でて猶空し  
かりし遠司徒が鬢の雪かと誤たれ  
たり。旧里に帰るとも、錦の袴を着され  
ば、買臣の勇も無かりけり。家を離れて  
星霜既に二百余廻りに成りぬれば、自  
ら争か七世の孫をも相見るべき。然れど  
も猶、旧里を思ふ心有りて、都の方を  
ぞ願ける。蛭蟬の齡、夕を待たぬ習ひ  
にて、芭蕉の命、風に破れしかば、何時の  
馴染みとは無けれども、各々哀れに  
覚えて袖をぞ絞りける。

続日本絵巻大成 19 定価 二八〇〇〇円  
土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞

印刷 昭和59年4月10日  
発行 昭和59年4月25日

編者 小松茂美  
執筆者 小松茂美

上野憲示  
榊原 悟

編集協力 島谷弘幸

株式会社 日本アート・センター  
東京都千代田区神田神保町1丁目25番地  
郵便番号101

発行者 嶋中鵬二  
発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目8番7号  
郵便番号104  
振替 東京2134

図版印刷 日本写真印刷株式会社  
本文印刷 三晃印刷株式会社  
製本 大口製本印刷株式会社  
製函 三真堂印刷紙器株式会社  
用紙 王子製紙株式会社  
神崎製紙株式会社  
表紙袖 望月株式会社

©1984  
ISBN4-12-402309-X